

冒頭 27 節でイエス様はこうおっしゃいました。「今、わたしの心は騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか」。ここで「心が騒ぐ」の「騒ぐ」は「かき回される」という意味で、5 章ではエルサレムのプールの水が掻き回され水面が沸き立つことでした。またマタイの福音書 2 章では救い主の誕生の知ったヘロデ王が「不安」になります。この「不安になる」が元のギリシャ語ではこのこと同じ「騒ぐ」という言葉です。

イエス様がヘロデ王と同じように不安になって良いのでしょうか。イエス様が心騒ぐ、救ってくださいというのです。救い主のはずで、期待して良いはずのイエス様が「救ってください」と言ったらこちらが不安になってしまいそうです。この言葉はイエス様がまことの神であられますが、同時にまことの人間であることを表しています。イエス様はわたしたちと同じ体と心をもっておられるのです。12 章 23 節でイエス様が「人の子が栄光を受ける時が来た」とおっしゃっています。十字架にかかる時がせまっているのです。ヨハネによる福音書では他の福音書のように十字架刑にされるため逮捕される前の夜、ゲツセマネの園において徹夜をして祈り、もだえて苦悩された記事がありません。その代わりにこの箇所があるのだといえるでしょう。ヨハネによる福音書におけるゲツセマネの園の祈りにあたる祈りといえるのでしょうか。

イエス様は「父よ、わたしをこの時から救ってください」と祈りつつ、もう一つ祈ります。「父よ、御名の栄光を現してください」これは主の祈りの「御名があがめられますように」の変奏曲のような祈りだと分かります。神様のお名前が清いものとされるように、とイエス様は祈るのです。

「私たちは祈ることしかできません」ということがあると思います。でもこのところでイエス様の祈りは祈ることと行動が一つであることが分かります。神様の栄光が現れるように祈ることはご自分が神様の御心に従うことだからです。でもそこには困難があります。あまりに大きな障害がある。十字架を背負うようにというのが父なる神様からイエス様への招きだからです。多くの人の罪を背負い代わりに神に捨てられ、呪われることを引き受けることだからです。だからイエス様は「心騒ぐ」と言われるのです。

その時、天から声がしました。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう」。父なる神様からイエス様への呼びかけです。前半の「栄光を現した」という過去の出来事はラザロの復活のことを言っているのでしょうか。死人の復活を通して神の栄光が現れたのです。後半の「栄光を現そう」はイエス様が父なる神の御心に従ってあゆみ十字架に進むことを表します。

このとき天から響いた声は「雷のよう」に周りの人には聞こえませんでした。ユダヤ人たちは神からの声のことを「バト・コル」（娘の声）と呼び、神からの呼びかけには次のような二つの特徴があるとされています。第一にこだまのような声であること。この日は雷のようでした。旧約の例では預言者エリヤに神が語ったのは「ささやき声」でした（1 王 19:13）。第二に「バト・コル」は聖書の言葉とつながっていること。今日の声はサムエル記上 2 章 30 節と似ています。「わたしを重んずる者をわたしは重んじ、わたしを

侮る者をわたしは軽んじる」。ヘブライ語の「重たい」「重んじる」は「栄光」という言葉と同じです。

このような父なる神様からのイエス様への呼びかけが周りにいた人々には雷のように聞こえ、またある人には天使が話しているようにしか聞こえませんでした。使徒言行録でパウロが伝道者に召されるとき、元々彼は教会を壊してしまおうと鼻息が荒い人でしたが、そのパウロに復活のイエス様が現れて声を掛けてくださいました。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と。使徒9章7節では「同行していた人たちは、声は聞こえても、誰の姿も見えなかった」とあります。同じ出来事のことを使徒22章9節では「一緒にいた人々は…わたしに話かけた方の声は聞きませんでした」とあります。二つを比べると矛盾しているように思えますがそうでもありません。ここでギリシャ語の「声」と訳されている言葉は「音」とも訳せます。つまりパウロへの復活のイエス様の語りかけを周りの人は「音」として何か聞いても「声」としては識別できなかった。今日の父なる神様からイエス様への語りかけも同じことが起きているのだと思います。

先週の金曜日に神学校で全校祈祷日がありました。講師の先生をお招きして、その牧師のそれまでの牧師としての働きを振り返る話をしていただき神学生も参加する牧師たちも自分を招いてくださる神様からの呼びかけを確かめ深める機会です。今回の講師であった先生が自分が牧師に召された時のことを話してくださいました。自分の体調が悪くなったり、仕事や家族のことなどでいろいろな大変なことが起こってくるなか、先生はその一つ一つの出来事を神様からの呼びかけと理解していました。そんなある日聖書を読もうと開いた場所がエレミヤ書1章「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ遣わそうとも、行って、わたしが命じることをすべて語れ、彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて、必ず救い出す」という言葉が目にとまった。その日、先生の目にこの聖句が飛び込んできた。それはまるで10.5ポイントの活字が12ポイントになって、さらに明朝体その時はゴシックになってはっきりと浮かび上がって飛び込んで来るようだった。そのようにして神様からの招きを覚えた。神様からの召命は一本釣りだと言われていました。固定電話でなく携帯電話にかかってくるように神様から招きが聞こえてくると。私たちはイエス様と違い救い主ではありません。しかし救いを与えられた者には、それぞれピンポイントでその人しかできない呼びかけがあり勤めが与えられています。祈りをもってしかできない私の仕事があるのです。

さて、ですから30節の所でイエス様が「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ」という言葉は聞いている人たちにとっては「この音が聞こえたのは」と理解したのだと思います。でも周りにいた人たちはただならぬことが起きたことは理解したでしょうし神様から何かの呼びかけがあったと分かったはずですが。

そこでイエス様はこれから何が起きるのかを説明されます。33節「イエスは、ご自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われた」とあるように、これから起きることである十字架の意味をおしえるのです。それは第一にサタンが追放されること。そしてイエス様が「上げられる」とき、人々も一緒にご自分のもとへと集めてくださることです。「上げる」とは3章でニコデモとのやりとりのときに話題になったように十字架の上に上げられること、さらに天に上げられるという二重の意味がこめられて

います。

34 節から意味上の段落が代わります。ここまでのイエス様の話を聞いた人々の反応が記されます。34 節「すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられねばならない、とどうして言われるのですか。その「人の子」とはだれのことですか」人々から疑問が起きます。つまりイエス様が語っていることは当時の常識では理解できないことだからです。

第一の疑問とは、救い主メシアはわたしたちと一緒にいつまでもいてくれる人ではないでしょうか。ここで「律法」がそう言っていると人々は言いますが、これはせまく旧約聖書の最初のモーセ五書ではなく旧約聖書全体という意味でしょう。たとえばエゼキエル書 37 章 25 節に「わが僕ダビデが永遠に彼らの支配者となる」ともう一度現れるダビデ王のような人物が約束の土地に人々を永遠に住まわせ、そのダビデ王も永遠と一緒にいるとある。当時のユダヤ人は自分たちがローマ帝国の属国であり、その支配から政治的に解放してくれる者をまっています。でもイエス様は期待していたダビデの再来のようだと人々は見ていました。でも上げられないといけないとは、いなくなることであり、さらに十字架で死んでしまうような弱い人は解放者ではないのではないかと。そういう疑問が人々に起きたのです。もう一つの疑問の「人の子」は誰かとは、イエス様が自分のことを言われるときにこのような言い方をされたので人々は誰か他の人のことを語っているのかと勘違いをして尋ねたのです。

さてここで人々の疑問とその奥にある期待を言い換えると当時の人々は、今、ここで幸せになることを求めたといえるのだと思います。今の政治的な圧政から解放してくれる王を求めていたのです。この世界、今生きている世界での幸せを求めることは間違っていないでしょう。この時期に神社に行くなら合格を願った絵馬が沢山見ることが出来ます。わたしやわたしたちの幸せを阻む大きな力があるとしたら、それを取り除いてくれそうな力ある人を求めるのはある意味当然のことではないでしょうか。

でもここでイエス様は世界をひっくり返すような言葉を語り、そこに向かって進んだのです。12 章 25 節の「自分の命を愛する者は、それを失う」「自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命にいたる」とおっしゃるのです。子供の時、ショックだったテレビ番組がありました。ウルトラマンの最終回です。ヒーローのはずのウルトラマンが強い怪獣に負けて死んでしまうのです。自分のもっている世界の安定感が壊されたように感じました。この世界の話はヒーローのかっこよい話であっても死んだらそこで終わりです。イエス様も死んでしまった。弟子たちもおしまいだと思ったはずですが、イエス様が十字架に架かり死んでくださった。でも三日後に復活されたことを聖書が証言しています。そして天に昇り、私たちのために住む場所を用意してくださっているのです。私たちの考える幸せが小さすぎる。神様の恵みは、人間のはかりをこえています。

35、36 節でイエス様は直接には人々の問いに答えていませんが、深いところの願いを受け止め答えておられます。本当の幸せがどのようにしてやってくるのかということです。35 節「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれぬように、光あるうちに歩きなさい」「暗闇がおいつく」は

「暗闇が勝利する」とも訳せます。暗闇とは何でしょうか。光の反対が暗闇でしょう。ですから暗闇とは光から離れていること、光であるイエス様から離れていることです。イエス様の外にあること、イエス様とは別に生きることが暗闇です。

「光をうける」(ヘブライ 6:4) ことが「洗礼」をうけることとして新約聖書で書いてあるところがあります。光にあずかるとは信仰を持つようになって洗礼を受けることです。ですからイエス様からの 36 節の招きの言葉「光あるうちに、光を信じなさい」は求道者の方にとっては、洗礼を受けて信仰者になるようにという招きでしょう。同時に既に洗礼を受けた人には初めの愛に立ち帰るようにという招きだと思えます。

一つ前の段落でイエス様が麦粒のように命を捨ててくださることで、私たちに永遠の命を与えてくださったことを学びました。そしてイエス様を信じて永遠の命を得た人は、イエス様と同じように自分の命を麦粒のように捨てることで永遠の命を保つとありました。私たちは捨てることで得るのです。信仰者になることは何かを捨てることです。イエス様に従うことは捨てながら生きていく人生に招かれているのです。

ジョン・ストットという神学者が次のような話をしています。「あなたがたの目を上げてください。皆さん方は、もちろん時代の子です。しかし、同時に永遠の子でもあるのです。天の市民であって、地上ではよそ者、寄留者、天の都に旅する巡礼者です。何年か前のある若い人の話を読んだことがあります。この人は、道で五ドル紙幣を見つけました。「それからというもの、歩くときには目を上げることをしなかった。長年かけて彼が収集したものは、29, 415 コのボタン、54, 172 コのビン、12 セントで、背中曲がってしまい。惨めな身になった」この若者が何を失ったかを考えてください。彼の目はいつも溝に向けられていたので、日光の輝き、星の光、友人の顔にあるほほえみ、春の花を見ることができませんでした。このようなキリスト者があまりに沢山います。わたしたちにとって大切な勤めがあります。しかし、自分がどのような存在か、自分がどこに行こうとしているかを忘れるほど、それらに心を奪われてはなりません」

私たちも五ドル札を拾った経験がないでしょうか。五ドル札とはある人には小さな成功、人から褒められたこと。五ドル札が何であるかは人によっていろいろでしょう。拾ったがために地面を見つめて一生懸命にいきてしまう。でも地上で一生懸命集めたものを何一つ死ぬときに持って行くことはできません。ギリシャ語の「人間」は「上」と「見る」という言葉でできています。動物は下を見てエサばかりを探しているからです。でも人間は上を見上げられる。そして天を見上げて祈ることができます。

「光あるうちにあるきなさい」とイエス様はおっしゃいました。信仰はとまった状態ではない。信仰はある動きの中に生かされることです。神様との愛の交わりの中に生かされることです。私たちの地上で生きる時間は限りがあります。「光あるうちに歩きなさい」とおっしゃる招きがあります。本当に価値あることへの招き、永遠に滅びることのない命へのイエス様の招きに従いましょう。